お別れに際して

本城　格

このたび私の退職に際しまして，「仏文研究」の特輯号を出してくださるとのこと，皆さんの御厚情身にしみてうれしく，心からお礼申し上げます。なお編集員の皆さんから，「仏文研究」に対して何か言うべきことがあればぜひ書くようにとの強い御要求。それで厚かましいこととは存じますがあえて筆を取り，2, 3思いつくままを書かせていただきます。

「仏文研究」は，昭和50年8月，院生の皆さんの積極的な総意の結集により発刊されてより約5ケ年が経過し，既に第8号までの刊行を見，こんど第9号が出されようとしております。このように継続刊行するために払われた皆さんの御努力にまず敬意を表しますとともに，これからさきも長く刊行がつづけられますようお祈り申し上げます。私たちはただ単に書物を読み，考えているだけではなく，考えている事がらに具体的な形を与えて客観的にその思考内容を眺めてみること，あるいはそれに対する他人の批判を仰ぐこと，つまり論文の形にすることが大切であると考えるのであります。論文を書くにはぜひとも発表機関が必要であることは言うまでもありません。発表の目標があり，その締切りにせかされないかぎり，ついなまけてしまうことになりがちなものです。近頃のきびしい経済状勢のもとでは，種々の困難が伴ないましょうが，この発表機関の維持に皆さんの御努力をお願いいたしたいのであります。

つぎに申し上げたいのは，修士課程の皆さん方は，修士論文の準備で時間的に余裕がないためか，あるいは遠慮されてのことか，従来あまり発表されなかったことを残念に思っております。今後は修士一回生の方も含めてあまり躊躇されずに発表していただきたいのであります。と申しますのは，近年卒業論文を拝見しておりますと，目をみはるような力作が往々にして見られるからであります。高額な掲載料を自己負担していただくことが前提となっておりますのに，このようなことを申し上げること自体が無理な話かも知れませんが，事情がゆるす限り発表されるようお願いいたします。

第三番目のお願いは，各号が出るたびにできるだけ合評会をしていただきたいということです。私たちは他人に指摘されない限り，自分の欠点には気がつきがたいからであります。最初の１・２号が出た当時には合評会が行われていましたが，その後次第に姿を消してしまったようであります。それを知りながら，ついなまけて督促をしなかった私自身の責任が大きいのであり，しかもその責任を問わずしてこういうことを申しますのは甚だ虫がよすぎるとも考えますが，どうかよろしく実行されますようお願いする次第であります。

以上，編集員の皆さんの御注文に甘え，つい勝手なお願いを並べ立ててまいりました。院生の皆さん方，今後ますます御研究に励まれ，大いに活躍されますようお祈り申し上げます。私自身も，今までよりは少しは時間の余裕が持てるようになりましたので，たとえ短い論文一篇でも自信の持てるものを書きたいものと念じております。